

研究科内公募プロジェクト要旨

公立進学高校における探究学習の教育課程化と 生徒の学習・進路選択

代表 小黒 恵 (比較教育社会学コース)

富田 知世 (比較教育社会学コース)

指導教員 本田 由紀 (比較教育社会学コース 教授)

1 はじめに

2013 年度施行高等学校学習指導要領では、総合的な学習の時間の教育課程上の位置づけが強化された。同時に、総合的な学習の解説編には「探究的な学習についても目標に明確に位置づけた」(文部科学省 2009, p.10)と述べられているように、総合的な学習の時間と探究学習が必要不可欠な関係にあることが強調されている。

総合的な学習の時間および探究学習の学校現場への浸透を望むのであれば、①探究学習を導入した学校において導入が可能となった要因(探究学習の導入にかかる課題)と②探究学習導入後に抱える学校の課題それぞれを明らかにする必要がある。本稿では、探究学習に比較的親和的な傾向にあり、かつ学習指導要領の拘束力がより強い公立進学高校から対象を選定し、上記の課題に取り組む。①については探究学習を導入しているX高校と導入していないY高校の比較から、②についてはX高校を事例として考察した。

これらの課題にアプローチすることは、現在進行中の大学入試改革が及ぼす学校現場への影響を予測することができるだろう。大学入試改革は総合的な学習の時間で目指されている探究型学習を評価できるテスト、大学入試への変革も目的とされている。課題①を検討することによって、大学入試のような外圧の強化が探究学習の教育課程化を押し進めることになるのかを予測することひができる。また、課題②の結果からは、新たな大学入試制度が生徒の選抜に及ぼす影響について予測することができるだろう。

また、本稿では先行研究の課題をふまえ、探究学習の導入や実践に関する課題を提示するのみならず、その改善主体についても検討していく。探究学習の実践面については、探究学習のアウトプット(生徒の学習

や進路選択に及ぼす影響)のみならずスループット(学習のプロセス)についても生徒を対象としたインタビュー調査によって詳細な実証分析を行う。

2 調査概要

(1) X高校の総合的な学習の時間と調査概要

X高校は中国地方に所在する公立進学高校である。2000年代初めに併設型中高一貫校となっている。

X高校の総合的な学習の時間では、「夢実現」をキーワードに生徒が進路意識を醸成する機会になること、5教科を中心とした教科学習と相互に関連して学力が高められるという効果がメリットとして想定されている。

X高校調査は、教師インタビュー・アンケート調査、在校生・卒業生インタビュー調査、資料収集により構成されている。調査実施時期は、2013年6月にX高校の探究学習に携わった経験のある教師3名に、2013年9月～12月にかけてX高校卒業生9名に、2013年11月にX高校在校生(2学年で探究学習を終えた生徒)10名にインタビューを行った。2013年11月に全教師61名を対象にアンケート調査を実施した。有効回収数は49名、回収率は80.3%だった。

(2) Y高校の総合的な学習の時間と調査概要

Y高校は東北地方に所在する公立進学高校である。男子校で、普通科と理数科を設置しているが、本稿で調査対象としたのは普通科である。

Y高校の総合的な学習の時間は言語リテラシーの育成という目的が据えられた時間となっている。1年次は各教科の代表教師が独自の教材を用意し、言語リテラシー学習を実施している。2年次では「情報の整理・運用能力」(まとめる、書く、データの取捨選択能力を高める)の育成が特に目指されている。

Y高校調査は、2013年9月に管理職、教務主任や

学年主任など要職につく教師, Y 高校に長期間勤務している教師など 8 名に, 12 月に国語・数学・英語・理科・地歴公民(社会)の教科主任 5 名に対してインタビュー調査を行った。9 月訪問時に, 教育課程表などの資料収集も実施した。

3 課題①:探究学習の教育課程化

Y 高校を比較対照とした際, X 高校で探究学習の導入が可能になった組織内・組織外要因として以下のものが挙げられた。

まず, 組織内要因の 1 つとして挙げられるのは人的・時間的資源の存在である。X 高校の一部の入学生は, 併設中学校を卒業した生徒であり, その生徒たちにも X 高校の総合的な学習の時間や探究学習を動かしていく力が備わっていた。リーダーシップを発揮する教師の存在もあった。さらに, X 高校には Y 高校に比べ放課後時間のゆとりもあった。もう 1 つの組織内要因として実践に密着した課題がない, ということが挙げられるだろう。実践に密着した課題が教師間で認識されていたのは Y 高校であった。X 高校に比べ Y 高校では教師間で共有されていた「危機感」があった。それは生徒の言語能力の低下問題である。したがって言語能力の低下という Y 高校教師の実践から見えてきた課題への対応が優先され, 探究学習の導入という外部の要請を受け入れる余地が残されていなかったものと想定される。

組織外要因の 1 つは X 高校所属学区が高校階層構造の変動を経験したことである。それが 1990 年代に起きたということが探究学習導入の背景要因を考える際には重要である。さらに X 高校が探究学習を導入できた大きな理由は教育委員会の強力な後押しもあったためである。

4 課題②:X 高校における探究学習に期待される影響と課題—在校生・卒業生の認識

総合的にいえば, X 高校の探究学習が何ら役に立たなかったと回答した者はおらず, 生徒は探究学習に何らかの有用性を感じている。しかしながら, 高校での学習・進路選択について, 学校側が理想として想定する「将来就きたい職業→進学したい大学→高校での学習」という「一本道」を形成し, 将来の希望から

逆算して現在につなげるという仕組みは, 大学進学という点ではある程度成功しているものの, 将来就きたい職業までは具体的にイメージできている生徒が少なく, また将来について考えるための十分な外部情報が不足しがちなことから, 意図どおりに機能しているとは言いがたい。大学での学習については, 大学の学問に対する興味・関心の深まり, 大学の学習で必要なスキルへの「慣れ」について探究学習が貢献しているという語りがあった。ただし, 大学でも大学卒業後の進路選択にまで探究学習が影響を及ぼしているのは, 元から「一本道」を属性として持っていた生徒であるという逆説的な状況が描き出された。また, X 高校の指導体制も「一本道」を属性として持っていない生徒に対して有効な指導を提供できていない可能性を指摘できた。

5 まとめと考察

課題①・②の検証を通して見出された探究学習の課題のうち学校現場で改善しうる課題として, 探究学習の実践面では, 関心のある学問分野や「一本道」の有無という属性的な要因による分化を緩和させていくような取り組みがある。例えば, 生徒が個人的経験から探究学習のテーマの着想を得ている傾向を踏まえると, 教師が指導の際に生徒の内在的な関心を掘り起こそうとするだけでなく, 学校内で「気づき」の材料—新聞・雑誌の記事や書籍などを提供する・入手可能な状態にしておくことが有効かもしれない。また, 現状における X 高校の探究学習の進め方自体について改善点を挙げるとすれば, 大学での学習とのレリバンスという点からすれば重要である論文の書き方について, 系統立った指導を行うということである。しかし, 本稿の知見の大半は学校現場で対応不可能な要因であると判断せざるを得ない。教育課程化の面・実践面ともに, 資源不足は明らかであり, 学校現場では対応が難しい。

昨今議論が活発化している高大接続問題の観点からすれば, 確かに進学高校のような大多数の生徒が大学に進学する学校でこそ探究学習は導入が望まれる学習であろう。本稿の事例でもメリットが確かに認められていることも考慮すれば, 今後は, 本来の目的を最大限に達成させるための方策を考える必要がある。